

着任のごあいさつ

林産試験場長 中島俊明

林業、林産業を取り巻く動きが加速化しています。

少し古い話になりますが、平成 19 年度の道産丸太の道外への移出量が 23 万 m³ と、過去 3 年間で 10 倍以上に急増しました。その背景は皆さんご承知のとおりですが、地域のカラマツ製材業界を中心に原木確保への強い危機感が増大するとともに、道東を中心とするカラマツ資源の保続が危ぶまれる状況となりました。

平成 20 年の夏、当時道庁で林産担当課に所属していた私は、道産丸太の最大の移出先となっていた石巻の合板大手のひとつ「セイホク」を訪問し、道では適切な資源管理に基づく林業・林産業の再生をめざしており、移出についても、流通業界を含めた業界主体で秩序あるルール作りを進めながら道産丸太の需要拡大に取り組んでいる旨のお話をしてきたその矢先、リーマンショックを引き金とする、深刻な世界同時不況が始まり、住宅資材、輸送用資材等木材・木製品の需要は激減し、原木価格も急落しました。

そして平成 21 年 9 月、劇的な政権交代が起こり、景気が底を打ったとの観測が徐々に流れる中、売れない原木が一転、原木不足が急激に再燃しました。その後、原木価格と製品価格の逆ざや現象も徐々に改善され、地域内でのバランスのとれた木材需給体制の進展が期待された矢先の「東日本大震災」となったわけです。

これまでも、林業・林産業界は、時代の荒波の中で浮き沈みを繰り返してきたわけですが、ここ何年かの荒波は、その周期も高さもこれまでになく急激で大幅なもので、業界も行政もついて行くのがやつの状況が続いています。

奇しくも 3 年前に訪問した石巻港の合板や MDF 等の工場群は壊滅的な被害となりました。道内の林産関係者も被災地の復興に向け今何ができるのかを考え、それぞれ準備を整えているところですが、木材・木製品の需要動向など依然として先行きが不透明な状況です。一方で、木材利用促進法が施行され、道の地域材利用推進方針も策定されました。また燃油価格も一層の上昇傾向にあるなど、強い追い風となり得る状況も生まれてきています。

こうした状況の中で、林産試験場としてどのように対応していくのか、(これまでと変わるものではないと思いますが)改めて意識しておく必要があると考えています。

- ・ひとつは、刻々と変化する業界(道民)のニーズをタイムリーに捉えて対応すること
- ・さらに一歩進めて、こちら側からも魅力的なニーズを提案していくこと

また、国の施策も国民の関心も、世の中の注目は東北に向かっています。置き去りにされることのないよう、これらの動向も注視していく必要があります。

林産試験場もまた、かつてない組織変革を経験して 2 年目の活動に入っています。私もアンテナを高く張って状況変化を見極めつつ、これに惑わされることなく、迅速かつ地に足をつけた対応を心がけ、林産試験場の評価、価値を一層高めるため微力を尽くしていきたいと考えております。

皆様のご指導とご協力をよろしくお願い申し上げ、着任のごあいさつといたします。

